

幼小接続教育の在り方の調査研究

～生活科とのつながりの中で～

田代高章・大野眞男・山崎浩二*, 下山恵・千葉紅子・渡邊奈穂子・高橋文子・小野章江・
吉田美奈子・川村真紀**, 阿部真一・高室敬・板垣健・松村毅・菊地香ゆり・市川あゆみ***
*岩手大学教育学部, **岩手大学教育学部附属幼稚園, ***岩手大学教育学部附属小学校
(平成30年3月2日受理)

1. はじめに

(1) 幼児教育が目指すもの

幼児期における遊びの重要性は言うまでもなく、新・幼稚園教育要領においても「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」と位置付けられており、幼児期の遊びは重要な学習であることに変わりはない。

幼児期に重要なことは、子どもの主体を育み、生涯にわたる学びの基礎を培うことにある。

(2) 平成29年度告示幼稚園教育要領改訂の基本方針

新・学習指導要領等では、幼稚園から高校まで「社会に開かれた教育課程」の実現を通して3つの資質・能力を育成するというで整合性が図られた。

幼児教育で育みたい資質・能力として「知識・及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3つが示されている。さらにこの3つの資質・能力は、遊びを通した生活全体の中で育まれるものであるが、年長児後半に期待される育ちとして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確に示された。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- ・健康な心と体
- ・自立心
- ・協同性
- ・道徳性・規範意識の芽生え
- ・社会生活とのかかわり
- ・思考力の芽生え
- ・自然とのかかわり・生命尊重
- ・数量・図形・文字等への関心・感覚
- ・言葉による伝え合い
- ・豊かな感性と表現

これを小学校の教師と共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図ることの重要性が強調されている。

2. 本研究にあたって

幼小の円滑な接続は、これまでもその重要性が指摘されてきていることであるが、新・教育要領、学習指導要領でも重視されている事項である。

そこで、年長児の発達を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を中心とした視点から捉えなおし、3つの資質・能力がどのように育まれているのか、また、それらは生活科とどのような関連性を持つのかを探り、「5歳児接続期の教育課程」の充実につなげることにする。

3. 研究の内容と方法

- (1) 研究保育や事例検討会を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目の視点から、年長児の発達を捉える。
- (2) 生活科のねらい、育成すべき資質・能力について、小学校の教員と共通理解を深める。
- (3) 先進園・先進校の保育・授業参観をし、幼小接続の在り方について学ぶ。

4. 実践

- (1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目から捉えた年長児の発達

【事例】

年長組に進級して間もなく、紙飛行機を作って飛ばす遊びを繰り返す楽しむ男児の姿が見られるよ





うになった。彼らは、よく飛ぶ紙飛行機を目指し、考えたり工夫したり、試行錯誤を繰り返しながら挑戦し続けたり、友達同士教え合いながら、仲間とのつながりを深めたりしていく姿が見られた。

このような遊びの中に、どのような育ちが見られるのか、「幼児期の終わりまでに育てたい姿」10項目の視点から考察してみる。

＜考察＞ 10の姿

- ・「先のとがった飛行機はよく飛ぶ」というつぶやきからは、いかひこうき、かもめひこうきなど、様々な折り方に挑戦しての気づきがうかがえる。
- ・「大きくて薄い紙はあまり飛ばない」というつぶやきからは、紙の「質、種類、厚さ、大きさ」を感じ取り、飛び方の違いに気付いていることがうかがえる。様々な紙飛行機を作っては試しながら、飛び方を「比較したり、予想したり、確かめたり」することで、見出した自分なりの発見である。



このような姿に、「思考力の芽生え」「数量・図形・文字等への関心・感覚」の育ちが読み取れる。

- ・このメンバーの一人であるA児は、なかなか自分の思いを言葉にして表現できないところがあった。しかし、よく飛ぶ紙飛行機をつくることのできるA児は、「どうやってつくるの？」と周りから教を請われると、自分から友達に教えたりするなど、自分なりの言葉で丁寧に伝えたり、仲間に認められたりする中で、自分に自信をもち自己を表現しようとする姿がみられるようになってきた。また、メンバーのリーダー的存在のB児は、仲間の中で優位に立ちたいという思いが強く、指示したり、従えたりするような言動になりがちだったが、A児の紙飛行機が自分の作ったものよりよく飛ぶのを見て、相手を認め、相手から学ぼうとする姿が見られるようになった。

自分に自信をもち、仲間の中で自己発揮していく姿からは「自立心」の育ち、仲間から学ぼうとする姿には「協同性」の育ちが感じられる。

(2) 小学校教員との接続を図るために

幼小の接続を図るためには、幼稚園での育ちを小学校側に伝えるだけでなく、小学校での学習がどのように行われているのか幼稚園教員が学ぶことも不可欠である。

① 生活科についての学習会

小学校教員との合同学習会を実施し、大学で生活科の指導を担当している田代高章教授から「生活科のねらいや育成すべき資質・能力」について学んだ。

【スタートカリキュラムにおいて大事にしたいこと】

- ・内容：教材研究、発問、分かる授業作り
- ・関係：班やグループでの学び合い、教師との信頼関係
- ・自己：子どもの自信、自己肯定感。体験が少ないと共感的な心の動きが少なくなり、気づきが弱くなる。

② 小学校の授業参観

9月には、附属小学校1年生の授業を参観し、その後、カンファレンスを行い、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」10項目の視点から、子どもの育ちを読み取った。

③ 幼小交流活動の機会を通して、

子ども理解を深める

幼小交流活動は、年長児と1年生と一緒に活動することを通し、相手に親しみをもち、人とのかわりを広げていくものである。同じペアで1年ずっと活動することで、相手意識をもち、また安心してかかわることができるようにしている。

また、年長児が小学校生活に期待をもち、小学校と円滑に接続していくこともねらっている。

年間4回程度の交流を行ってきているが、今年度は以下の計画で実施した。

	期日	場所	内容
1	6/23(金)	小学校	なかよしペアで一緒に取り組み、親しみを持てるような活動。 (ペアの旗作り)
2	8/23(水)	小学校 プール	なかよしペアでの水遊び
3	10/31(火)	幼稚園	なかよしペアで一緒に取り組み、かかわりを深める活動 (コース作り、お弁当を一緒に食べる。)
4	2/21(水)	小学校	小学校の授業体験

毎回の交流活後は、反省の機会を持ち、幼小の教員間で子どもの発達理解を深めてきた。

以下に、3回目の交流活動における振り返りの状況を紹介します。

第3回交流活動

期日：10月31日（火）11:30～13:30

場所：附属幼稚園（保育室、ホール、園庭）

対象：附属幼稚園年長組2クラス、
附属小学校1年生3クラス

1) 交流のねらい

年長児	1年生が相手の思いを受け止めたり自分の考えを伝えたりしている姿から刺激を受け、1年生と思いや考えをやり取りしながら遊びを楽しもうとする。
1年生	自分の思いを伝えながら、年長児の思いを受け止め、やりとりしながら、より遊びが楽しくなるように活動に取り組む。

2) 活動の概要

幼稚園の遊具や素材を使って、「なかよしペアで協力して作る活動」を計画した。廃材を使ったドングリ転がしコース、積み木を使ったテープ転がしコース、園庭の探検コースを、なかよしペアで一緒に考え、作り始めてい



った。3回目の活動ということもあり、お互いの顔も分かっている、すんなりと活動に取り組み始める姿が見られた。また、段ボール・牛乳パック・空き箱等、様々な廃材を十分に用意したり、ホールすべての積み木やカラー椅子を使ったりできるようにした。



豊富な材料があることや、互いの存在に慣れてきているペア同士で一つのものをつくるという

活動が、幼小双方の子ども達の意欲を引き出すことにつながり、時間が足りなくなるほど作ることに夢中になっている姿が多くみられた。

3) 活動の反省会

年長組A児を含むグループでは、ねらいに近づく姿が見られ、このグループの活動の姿に焦点をあててカンファレンスをすることにした。

ア、A児について

1回目・2回目の交流活動においては、全体的に初めてのペア同士のために緊張感が高かったり、新しい活動に戸惑いを見せたりする姿が見られた。特にも、A児は、初めて行う活動の見通しが持てない苛立ちが言葉に表れ、1年生も戸惑っている様子が大きかった。

イ、当日のビデオ記録について

状況：ホワイトボードに切った牛乳パックや空き箱を斜めに貼り付けていき、コースを作っている。ある程度できたので、どんぐりを転がしてみようとする。

〈表記：年長児→A、1年生→1〉

1：（どんぐりを転がしてみる。でも、最後の手前で止まってしまう。）

あ、（どんぐりが）たまっちゃう。これ、多分さ。

A：ちょっと待ってよ。（コースの最後に空き箱をガムテープでつながら。）

1：あ、ちょっと待って！ちょっと剥がすよ。（幼がさっきつけた空き箱を取る。）こうすればいい。（空き箱を付ける位置をちょっと外側にずらして貼る。）

A：（見ている。）

1：こっちにくるとぶつかっちゃうんだよ。いつもこっちの端に行きやすいじゃん。

A：（見ながら考えている。）

あ、いいこと思いついた。あのさ、ここがぶつかってるから。ここを止めればいいんだよ。（先ほどの空き箱とその前の牛乳パックをガムテープでつなく。）

1：（受け入れて転がす。ギリギリで止まる。）

あ、ギリ止まった。

A：じゃ、ちょっとだけ斜めにすれば。

（空き箱をつける角度を少し変えて貼る。）

ウ、カンファレンス

【視点】

本園の5歳児教育課程Ⅲ期の姿と照らし合わせ、この場面でのA児を中心とした育ちを読み取る。

（小）初めのうちは、1年生の声ばかり聞こえてきて、A児がなかなかしゃべっているのが聞き取れなかった。でも、A児が1年生の言う意見を取り入れて、箱を貼る位置

を変えているのは、「相手を受け入れながら自分の気持ちを調整する」という姿なのではないか。

（幼）確かに、年度初めは、調整ができなくて、思い通りにいかないと怒ってしまうことも多かった。クラスの中でもずいぶん変わってきたとは思いますが、今でもそういうことはある。

（小）6月の最初の幼小交流の時は、旗を作るのになかなか大変で、小学生も年長児とどうかかわったらよいか、戸惑っている感じだった。どう接したらいいのかな…と考えている感じだった。それが、だんだん、小学生も、こうかかわたらうまくいくのかな、と理解してかかわることができるようになってきたのではないか。同学年・同級生だとうまくいかないことも、一つ上の小学生と一緒にやることで、1年生のやっていることにも興味を示し、相手の考えを受け入れて考えることができるのではないか。そういう意味では、幼小交流があることで、この気持ちを調整する育ちを体験する機会の一つになっていて、幼小交流の意味があると言えるのではないか。こういう「気持ちを調整する」というのは、10の姿で言うと、どういう姿と言えるのか。

（幼）道徳性・規範意識の芽生えとしてとらえることができると思う。

（小）なるほど。そして、一緒に作るものがあることで、ものを通して、人がいて、道具と材料を通してつながっていくということなんですね。

～中略～

（小）こうやって、どの観点でみるかという定義があると、育っていることから目標とかねらいが生まれてくるというのが分かる。

（幼）A児の「いいこと考えた」の言葉も、彼なりにいろいろ思考を働かせて、そこに、1年生の意見を聞いて、自分の考えを調整したということだと思う。

（幼）そして、そのいいことの中身を互いに説明している。それも、「自分の思いや考えを分かるように話したり、考えを深め、言葉を通して友達と心を通わせる」ということです。

(小)「言葉による伝え合い」ですね。

(小) 幼稚園の子どもにとってだけでなく、小学生にとっても、この交流が互いにいい影響を与えているんだなというのを感じた。

こうやって話していくと、子どもの育ちを見るだけでなく、活動内容の反省もしやすいのではないか。今の話みたいに、教育課程とかこの活動のねらいとかで、こういう力をつけたいというものが明確にあると、どういう活動内容がいいのかがより見えてくる。そうでないと、ただ「楽しかった」だけの反省になってしまうと思う。

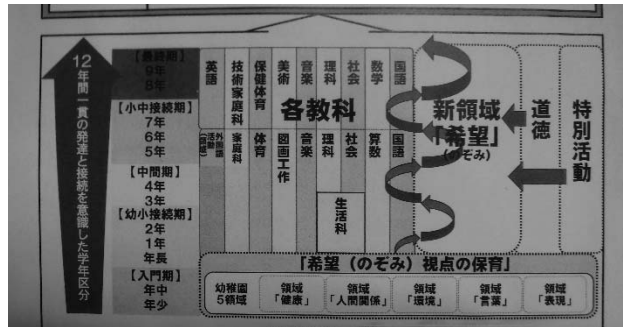
エ、カンファレンスからの学び

- ・年長児と小学生が「こうしたらどう？」と言われ「そうだね。」と相手の思いを受け入れてコースを作り上げていく姿に、相手の思いを受け入れながら自分の表しを調整しようとする育ちが見られる。
- ・異年齢の友達との交流を通して、1年生と年長児それぞれに育ちがあり、その具体的な姿を共有して受け止めることができた。
- ・一人一人の活動する姿を「5歳児Ⅲ期の教育課程」に沿って話し合うことで、子どもにどのような資質・能力が育っているのかを具体的に理解することができた。
- ・次の活動を考える際、今の子どもの育ちから、もっと育てていきたいことはどんなことなのか考え、次の活動はこんな計画にしたいと、PDCAサイクルで考えることにつながった。
- ・子どもに育っている姿を読み取ることにより、交流活動の内容を振り返るだけでなく、日々の実践をより充実させることにつながった。
- ・今後も交流活動場面での子どもの育ちを、10項目を視点として話し合い、幼小の教員の子どもの発達理解を共通にしていきたい。
- ・これらの実践から、幼稚園教員が「幼児期の終わりまでに育てたい姿」10項目についての理解を深めることの重要性と、幼小の教員間でこの「10の姿」を共通の言語とすることで、幼小の

接続にかかわる理解が深まるのだということが分かった。

(3) 先進園・先進校の実践から

12月1日～2日に行われた、広島大学教育学部附属三原学校園の公開研究会に参加した。幼小中の一貫カリキュラムを組んでおり、学校園独自の3つの資質・能力の育成を図る活動・単元を各学年の発達段階に応じて、系統的に構成・配列して指導している。次期教育要領・学習指導要領に示された「3つの資質・能力」を基盤にとらえたものであり、まさに先進的なカリキュラムを作成して取り組んでいる研究だった。



広島大学附属三原学校園研究紀要より抜粋

そして、育てたい資質・能力について、学校間で共通の理解があることが、保育・授業・学校間の交流活動全てにおいて示されていた。20年近く幼小中一貫した研究を積み重ねる中で、共通の言語を用いて、育てたい資質能力を共有して子どもたちを育てている研究は、本学校園でも取り入れていきたいと感じた。

5. 今後に向けて

本年度、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を視点とすることで、幼稚園教員で「子どもの体験の意味」の理解を深めたことと、幼小双方の教員間で共通の言語をもとに接続の在り方を探っていける可能性があることを感じた。

そこで、次年度は、幼小の教員間の連携をより深めながら、次のことに取り組んでいきたい。

- ・幼小交流活動においては、本園の「5歳児の教育課程」もとにを計画、反省を行う。その内容をもとに、5歳接続期の教育課程（Ⅲ期）を改善していく。
- ・交流活動以外にも行われてきた幼小連携にかかわる子どもにかかわる情報交換や引き継ぎの内容も含め、連携推進計画の整理を進めていく。
- ・研究部と連動して、幼小双方の研究会に互いに参加して学び、教育の違いや目指す姿を共有できるようにする。
- ・教育課程編成に留まらず、保育や授業の教材研究や教材の工夫について、双方で交流できるような体制を作っていく。

【参考・引用文献】

- 1) 幼児教育じほう 2017. 5 より
無藤 隆「論説 幼児教育の新しい姿から小学校教育の接続を見通す」
奈須 正裕「論説 幼児教育と小学校教育の接続—学びの履歴をつなぐとは—」
- 2) 附属幼稚園学習会資料 2017. 6. 17 より
田代 高章「学習指導要領改訂を踏まえた小学校生活科と幼児教育のつながりについて」
- 3) 砂上 史子「幼稚園教育要領の改訂の論点」
附属幼稚園公開研究会講演資料より
- 4) 平成 29 年度広島大学附属三原学校園研究紀要
- 5) 平成 29 年度附属幼稚園研究紀要
- 6) 幼稚園教育要領